2009年、日本一の診療所激戦地区、JR新宿駅前で開業。働く忙しい人に役立つクリニックを掲げ、ピーク時には外来患者数1日平均500人超という人気診療所に成長させることに成功した医療法人社団SEC新宿駅前クリニックの蓮池林太郎院長。スマホでクリニックを探すようになった時代における患者のニーズを捉え、患者視点での利便性を追求した仕組み作りなど、マーケットインの発想の原点には、型破りの生き方をしていた青春時代があった。

高校2年で家を出てバイトで生計立てる

――最初に蓮池先生の原点からお聞きします。幼少期はどんな子供だったのですか。

蓮池　出身は東京都板橋区です。父は東京大学医学部（理科三類）出身の産婦人科医で大学病院の勤務医、母は東京女子医科大学出身の眼科医で開業医をしている家庭でした。いわば、勤務医と開業医の両方の働きぶりを見ながら育ったわけです。兄弟は4歳年上の兄がいます。

私は1260グラムの未熟児で生まれ、数カ月間も保育器内で育ちました。今ほど医療技術が発達しておらず、「命の危険がある」「網膜症などの後遺症が残るかもしれない」と言われたそうですが、無事、育ちました。

両親ともとても多忙にしていたので、幼少期は広島に住んでいた母方の祖母のもとで過ごし、祖母からは戦時中、広島に落とされた原爆で実の弟を失ったことなどをよく聞いたことを覚えています。

結構腕白な子でしたね。勉強はあまり好きではありませんでした。親の意向により苦しい思いの中で中学受験をして、板橋区にある中高一貫の城北中学にどうにか合格したものの、兄は世田谷区にある筑波大学附属駒場中学・高校（筑駒）に通い優秀だったこともあり、何かと言うと兄と比べられ、常に劣等感を感じていました。

「理三の子に生まれた」こともあって、自己否定感が強かったですね。中学生の頃から、英語の塾に通うようになったり、家庭教師をつけてもらったりと、特に母が教育熱心ということもあり、好きではない勉強を強制的にやらされる苦しさは、勉強が好きで勉強のできる人たちにはなかなか理解できないと思います。

――やはり教育熱心な家庭だったのですね。あまり遊んだりはしなかったのですか。

蓮池　高校時代、東大受験を専門に指導する塾「鉄緑会」にもわけもわからず入塾させられ、勉強に対する親の締め付けはかなり厳しいものがあるわけです。一方、高校生になると自我に目覚め、恋愛をしたり外に遊びに行ったりしたくなるわけで、いわゆる、反抗期に入ったのですね。

高校2年の頃から、あまり学校に行かなくなり、社会に出ることに興味が出てきて、池袋のカラオケボックスで客を呼び込むキャッチのアルバイトをするようになりました。カラオケボックスでは同僚の社会人や大学生の中でも成績はトップで、上司の正社員からは「コツをつかむのがうまくて、行動力があるね！」とおだてられつつ、夏休みにはこのキャッチのバイトで約25万円も稼ぎました。そのほか、ファミリーレストランの皿洗い、コンビニの店員なども経験しました。

当然、学校から家に連絡が入り、私の不登校を知った両親と大喧嘩をしたこともありました。当時はプロボクサーでスーパーフェザー級の元日本チャンピオン三谷大和さんの指導を受けながら付き人も経験、プロボクシングの世界の厳しさも学んでいたころでした。家での生活に嫌気がさした私は、両親の反対を押し切り家を出て、城北高校の近くで一人暮らしを始めることになり、生活に必要なお金はアルバイトでどうにか食いつなぐことになります。

社会の厳しさを知り猛勉強し医学部も進級試験も一発で突破

――そんな調子でよくドロップアウトしませんでしたね。

蓮池　今でも思い出すのは、高校2年生のときに担任だった大庭先生です。学校を休みがちだった私を心配し、しょっちゅう電話をくれ、ときには晩ご飯もおごってくれました。高校2年生のとき、テストでは赤点を連発していましたが、先生は成績や出席日数で他の科目の先生と交渉してくれ、どうにか進級できました。大庭先生がいなければ高校を中退していたかもしれません。

一方、バイト生活やボクシングの付き人として大人の人たちとの付き合いを通して社会の厳しさを知ることができたのは、その後の人生でも役立つことになります。学歴がないと、就ける仕事は限られてしまうし、お金を稼ぐのも難しくなるという社会の現実を知り、「世の中、お金で回っているな」と感じたものです。

高校3年生にどうにか進級できてからは「心を入れ替えよう」と一念発起。予備校に通わず一人暮らしで勉強を続け、「人の役に立ち、お金を貰え、感謝される仕事」をしたい、開業医になりたいと、医学部を目指しました。医師になれば女の子にモテるかもという不純な気持ちもあって、孤独のなかで自分を律するのもなかなか大変でした。それでも猛勉強をして、成績が伸び悩んで苦しい時期もありましたが、現役で帝京大学医学部に合格できました。合格できたのも、学費を出してくれた両親や恩師の先生方のおかげでもあり、今でも感謝しています。

高校時代のバイト生活で、何事もコツをつかんで戦略的に動くことの重要さを知りました。この戦略が大学の進級試験で活きることになります。医学部の同級生は約120人でしたが、留年せず6年間で卒業できたのは半分程度でした。毎年2割、3割が留年するなど、進級試験はとても難しいものでしたが、留年だけは絶対に避けたかったので、先輩や留年経験のある人からもらった進級試験の過去問で猛烈に勉強しました。

進級できる人と留年する人の違いをよく観察したところ、過去問や資料を持たない人は留年する傾向があることが分かったのです。高校時代に心折れかけた私です。もう両親を悲しませたくなかったので、大学ではバイトはしませんでした。勉強する時間を削って、1時間1000円稼ぐより、勉強して留年する確率を下げるべきだと考えたのです。

さまざまなルートから手に入れた貴重な過去問は、留年してしまい同学年になった先輩に提供し、そのかわりに他の同級生が持っていない貴重な資料をもらうことを思いつきます。業務用のコピー機を購入しましたし、繰り返すことにより試験前には学年一の良質な資料が集まることになります。記憶力があまり良くない自分でも、留年の危機も迎えることなく医師になることができましたが、良質な情報を得る仕組みを構築したことによる「情報のハブ化」のおかげでした。常識に囚われることなく物事を俯瞰して捉え、交渉力を駆使して最短距離で進級試験に確実に合格するための戦略の重要性を学んだわけです。

激戦地区の新宿で開業ネットで集患に成功

――どうすれば目指すゴールに最短でたどり着けるのか。当時から考えていたのですね。その後、20代で日本一の激戦区、新宿駅前で開業されました。どのような経緯で開業されたのですか。

蓮池　父は大学病院の医局に所属する勤務医で、当直があり、当直のない日も夜遅くまで仕事をするなど非常にハードな毎日でした。

一方、母は眼科の開業医で、子どものころよく遊びに行っていたこともあり、昔から「同じ医師なのに医局に所属している勤務医と、自分でクリニックを経営している開業医では、ライフスタイルが全然違う」と感じていました。身近に2つの医師のキャリアを見てきて、自分の将来像を考えたとき、大病院の勤務医より開業医の方が向いていると考えるのは明らかでした。

そのため大学時代から、どうすれば盛業するクリニックを開業することができるのかを考え、クリニック経営の勉強もしていました。国立精神・神経

▶ 続きは、本誌10月号をご覧下さい

(C) 2024 日本医療企画